2020年11月15日　久宝教会　降誕前 第6主日礼拝

メッセージ「大人として生きる」　　牛田匡牧師

聖書　マタイによる福音書　5章38－48節

昨日は好天に恵まれた中、この新しい建物の献堂礼拝とこども園の新園舎おひろめ会を、無事に行うことが出来ました。本当は4月に行いたかったのですが、新型コロナウイルスのための休園休校措置などがあり、一体いつになれば、皆で集まることが出来るのかということを、探りながら延期に延期を重ねて、この時期になりました。在園の4・5歳児たちと、卒園児の小学生たちが40人ほど集まってくれました。沢山の人が密集してはいけないということで、保護者の方々の参加も地域教会の方々の参加も断り、本当に内輪だけの会でしたが、子どもたちは献堂礼拝と、それに続いた出し物として大道芸人のQちゃんの披露する舞台を楽しんでくれて大盛況でした。多くの方々に支えられながら、この日を迎えられたことに感謝です。

献堂礼拝の中では子どもたちに、今から61年前にこの久宝寺の地に久宝伝道所が誕生し、そこからこの保育園が生まれ、さらに各地の保育園や高齢者敬老ホームが生まれて来たことを伝えました。それらは「神様と隣人を大切にする」というイエス様の教えに従おうとするこの教会の歩みでしたが、大きな社会福祉法人となった今でも、私たちの原点として常に心に刻んでおきたいことです。

「神と人とを大切にする」……。子どもたちの笑顔を見ていると、平和を感じますし、そのような時になら、誰にでも優しくなれそうな気がします。しかし、世界を見回してみると、そんなことばかりでもありません。今月行われたアメリカの次期大統領選挙では、コロナのために大規模な郵送投票も行われ、現職のトランプ大統領が「不正が行われた」と訴訟を起こし、報道を見ているだけでも大変な騒ぎとなっていました。そのような選挙騒動の中、私が恐ろしいと感じたのは、銃の売り上げが伸びたというニュースでした。「このままでは暴動が起こるかもしれない」「自分たちも襲われるかもしれない。だから念のために銃を用意しておこう」ということなのでしょう。アメリカ社会の中では、人々の分断と対立、格差がそこまで拡がっていた、ということに驚かされました。

日本ではそのような分断と対立は、「銃」のような目に見える形では現れていませんが、恐らく日本でもこのコロナの影響下で、ますます分断と対

立、格差と差別は拡大していきつつあるのではないかと危惧しています。人類の歴史を振り返ると、恐らく大昔からずっとそのような富と権力による分断と対立、支配と被支配の関係というものが、続いて来ていたのでしょう。今から約 2000 年前の古代オリエント、パレスチナの人々もまた、現代以上の過酷な状況の中で暮らしていました。

「マタイによる福音書」の 5 章から 7 章にかけては、イエス様が山の上で大勢の群衆たちに話された教えを説かれた話がいくつも続けて記されているために、それらをまとめて「山上の説教」と呼ばれていますが、今回の聖書の箇所も、その「山上の説教」の中の 2 つのお話でした。しかし、一度聞いてもすんなり理解できないような、よく聞くとギョッとするような、それこそ世間的な常識とは全く反対の変なお話でした。

一つ目のお話は「悪人に手向(てむ)かうな」「右の頬(ほお)を打たれたら、もう一方の頬も出しなさい」「下着を取られたら、上着をも与えなさい」などと言うのは、いかにも非常識です。イエス様は、どうしてそんなことをしなさいと言われたのでしょうか。まず 38 節ですが、「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と言われている」とは、古くはバビロンのハムラビ法典やヘブライ語聖書（出 21：24、申 19：21）にも記されている法律で、古代オリエント社会で共有されていた「同害同復法」でした。現代の私たちの感覚からすると、「目には目を、歯には歯を」というのは、残酷なようにも感じるかもしれませんが、元々は「目をつぶされたから、仕返しに殺してやる」というように、報復、復讐行為がエスカレートしないように定められた相手との対等性を保つための法律だったのだそうです。

しかし、それがいつの間にか「やられたら、必ずやり返す」というように、報復を正当化、義務化するような律法として人々に理解され、利用されるようになってしまっていました。そのような人々に対してイエス様は言われました。「しかし、私は言っておく」そうしてはいけない。「右の頬を打たれたら、左の頬も出しなさい」「下着を取られたら、上着をも与えなさい」……。しかし、この言葉をそのまま実行したら、それこそ生きていけなくなってしまいそうです。イエス様はこの言葉を誰に向かって語られたのでしょうか。

40 節にある「あなたを訴えて」とは、訴訟、裁判を起こすということですが、そもそも裁判など、時間とお金にゆとりがある人にしか起こせません。「下着」と「上着」とは、日本語の翻訳があまり良くありませんが、室

内で着る「普段着」と外で着る「コート（外套)」でした。庶民はいわゆる布団を持っておらず、夜、寝る時には、その上着、コートをかけて寝ていたようですから、ヘブライ語聖書の律法には、「人の上着を取ってはならない。借金のかたとして取っても、日没までには返さなければならない。そうすれば彼はその上着にくるまって寝ることが出来る」と記されていました（出 22：25－26、申 24：12－13)。

布製品は当時、高価なものでしたから、庶民は上着は一つ、普段着も数枚しか持っていなかったのでしょう。ですから、ここで言われているのは、「借金のかたとして普段着を取ろうとする者には、上着も与えなさい」ということです。実際には律法を無視した、借金の取り立てが多く行われていて、このような言葉に、人々は実体験を重ねて聞いていたのだと思います。41 節の「あなたを徴用して、1 ミリオン（約 1.4km）の荷物運びを命令したら、2 ミリオン行きなさい」ということも、よくあったことだったでしょう。実際に、兵隊から刀や槍を突き付けられて命令されたら、庶民には断ることは出来なかったはずです。42 節「求める者には与えない。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない」……。言葉として、理屈としては分かるけれども、実際にはそんなことは出来ない。そんなことをしたら、自分たちはますます権力者から虐(しいた)げられ、搾取に拍車がかかってしまうのではないでしょうか。

そもそも、ここで「あなたがた」と言われている、イエス様が「山上の説教」を語られた人々とは、一体どのような人々だったでしょうか。それは 5 章の直前、4 章の最後 24 節に書いてありますが、「いろいろな病気や痛みに苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人たち」という大勢の群衆たちであり、富と権力を持たない、差別され、搾取されている側の人たちでした。しかし、そのような大勢の群衆たちの中に、律法学者など指導者側、権力者側の人たちも紛れていたようです。「最近、うわさに聞くイエスとは、一体どんな男か」と思い確かめに来ていたのでしょう。

だからこそ、そのように群衆たちの中に紛れていた権力者に対して、イエス様は群衆たちを表わす複数形の「あなたがたは」ではなく、単数形で「あなたは」と言われたのかもしれません。人々を虐(しいた)げて、人々から不正に取り立てているあなたは「悪人のように振る舞ってはいけない。人々が思い余って、あなたの右の頬を打ってきたら、もう一つの頬も打たせてやりなさい。あなたはそれ以上に、人々を虐(しいた)げて来たではないか。あなたが

しばしば訴訟を起こして人々から普段着を奪って来たように、人々があなたの普段着を要求したら、上着をも与えなさい。求める者には与え、借りようとする者に背を向けてはならない」……。

43 節以降は、もう一つのお話です。まず「隣人を愛し、敵を憎め」という言い伝えが紹介されていますが、ヘブライ語聖書の律法には「隣人を愛しなさい」（レビ 19：18）とはあっても、「敵を憎みなさい」という掟はありません。しかし、当時の人々の間ではそのように理解され受け止められていた、ということなのでしょう。ここでもイエス様は「しかし、私は言っておく」と言って、反対のことを言われました。「敵を愛し、あなたたちを迫害する者のために祈りなさい」。何故なら「天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(45)。

これらの言葉は、本当にイエス様らしい言葉だと思います。この世界の全て、すべての命は神様が造られた物であり、「何は清くて、何は清くない」などというものではない(使徒 10:28)、たとえ今は律法に違反していても、道を外れていても、戻って来ることがあり、戻って来ることが出来る。全ての人は等しく神様の恵みの下にある、というのです。だから「あなたがたは、天の父が完全であられるように、完全な者となりなさい」(48)、あなたがたも天の父と同じようにしなさい、というわけです。

ここで「完全な者」と言われているのは、別の訳では「成熟した者」「大人」とも訳せる言葉です。最初に歌った『讃美歌（1954 年版)』452 番にも「完全(またき)にむかいて進まん」という一節がありましたが、足りない所だらけの自分が、天の神様と同じような「完全な者」になんてなれない、絶対に無理、と思いますが、枝についた果物、木の実が少しずつ成熟していくように、小さな私たちも神様によって少しずつ大人にされて行くのだと思えば、「大人として生きる」ことは、まんざら不可能でもないかもしれません。

「大人として生きる」……。自分に敵対する相手をも大切にするとは、どういうことでしょうか。私たちは相手の立場に立つことなんて出来ません。相手のことを思いやっているつもりになりながら、実は相手の足を、また誰かの足を踏み付けているかもしれません。自分の非を素直に認めて、求める者には与えること。それは決して簡単な道ではありませんが、全ての命を創り、育んでくださる神様は、そんな私たちに「大人として生きなさい」と言われています。その言葉は真実でしょうか。私たちは今日も、その言葉を真実なものにするように、神様によって用いられて行きます。